

〈書評〉

バイアスを飛び越えて——新時代の対比列伝を読む

植 朗子『鬼滅夜話——キャラクター論で読み解く
『鬼滅の刃』』扶桑社、2021年

遠藤 直子

令和的であり、ウィズコロナ的な現象

『鬼滅夜話』（以降、本書と称する）は、〈AERA dot.〉¹にて2020年12月より連載された、『鬼滅の刃』²に関する植朗子氏のコラム³が書籍化されたものである。

『鬼滅の刃』（以下、『鬼滅』）とは何であるかは、ここで改めて説明するまでもないかもしれない。原作は2016年に連載が開始した漫画であるが、2019年にはアニメ化され、多方面にわたるコラボレーションやタイアップは引きも切らず、時には便乗、パロディ、果てはパクリといった形で、2020年には爆発的に人口に膾炙したとわいい。作中に表われる「全集中」「〇〇の呼吸」といった独特の言い回しは、その意味を理解しているか否かに関わらず、時の首相までもが国会での答弁に際して用いる⁴に至るといふ、文字どおり「猫も杓子も」といった様相を呈していたのは未だ記憶に新しい。

『鬼滅』の国内にとどまらないヒットは、いくつかの要因が重なった結果であろう

1 朝日新聞出版が運営するニュースサイト (<https://dot.asahi.com/>)。

2 吾峠呼世晴『鬼滅の刃』全23巻、集英社、2016～2020年。

3 カテゴリーは“エンタメ” (<https://dot.asahi.com/ent/>)。植氏に限らず、コラム執筆者を括弧する URL は不在である。

4 2020年11月2日、衆議院予算委員会にて。

が⁵、年号が切り替わるのと相前後して世界を覆ったコロナ禍も無縁ではないだろう。いわゆる「おうち時間」をきっかけに映像配信サービスの利用率が増加し⁶、視聴されたコンテンツの中でも『鬼滅』は圧倒的な人気を誇っていたという。『鬼滅』をめぐる社会現象の理由やブームの軌跡、それが各方面に与えた影響に関する分析は多数発表されている⁷。さらに、在宅時間の長さや、人と人との物理的な隔たりに反比例するように、距離や時差の大部分を無効化するプラットフォーム⁸の利用拡大によってリアルタイムでの感動の共有が可能になったことも、『鬼滅』ブームの波及に拍車をかけたといえよう。本書の書籍化も、ネット上でそれを望む声が多く寄せられたゆえであったときく。もとより『鬼滅』の物語は深刻な暗さにひたすら落ちこむことも、不自然な明るさに傾き過ぎることもなく、緩急の至妙なバランスの中で淡々と展開する。おそらく意図的であろう余白が少なくなく（一方で緻密な裏設定も多いが）、それを埋める作業を読者・視聴者（あるいはアニメ製作者）に委ねる軽妙な潔さがある。委

5 2020年に原作漫画が完結し、また劇場版が公開された。

6 「有料の動画配信サービス利用率は25.6%、コロナ禍で動画視聴スタイルが激変『動画配信ビジネス調査報告書2021』」（〈インプレス総合研究所〉／2021年5月20日／<https://research.impress.co.jp/topics/list/video/625>）。

7 小新井涼氏は、社会現象がいかにして生まれ浸透していくかを、客観的データに基づいて分析しており、非常に興味深い。小新井涼『鬼滅フィーバーはなぜ起こったか？データで読み解くヒットの理由』ICE新書（インプレス）、2020年。小新井氏の記事はオンラインでも公開もされている。小新井涼『『鬼滅の刃』ブームとは何だったのか…アニメファン以外からも絶大な支持を得たワケ』（〈現代ビジネス〉／2021年6月3日／<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/82516>）：同「世界的現象となった『鬼滅の刃』の大ヒット、データから見えた「これだけのこと」」（〈現代ビジネス〉／2021年6月3日／<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/82517>）。

武井保之「大ヒットで見えた鬼滅の刃「定番化」の可能性」（〈東洋経済ONLINE〉／2020年10月23日／<https://toyokeizai.net/articles/-/383594>）は劇場版大ヒットの経緯を辿る。気象予報士の森田正光氏が2020年11月18日にYahoo!ニュースに寄稿した、劇場版の死闘場面の日時を特定する記事は、大きな話題を呼んだ（<https://news.yahoo.co.jp/byline/moritamasamitsu/20201118-00208206>）。

三河かおり『『鬼滅の刃』はなぜ社会現象となったのか——寄り添う死者たちの「思い」とコロナ禍が生んだ強い「共感」』（〈nippon.com〉／2021年1月15日／<https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00667/>）。

斎藤環、佐藤優「暴力のトラウマは、人を鬼に変えることがある…『鬼滅の刃』が大ヒットする日本で精神科医が考えたこと」（〈PRESIDENT Online〉／2022年1月10日／<https://president.jp/articles/-/52739?page=1>）。

上述のものはほんの一部であり、関連記事や書籍は枚挙にいとまがない。

8 SNS、特にpixivとTwitter（およびそれに連動するアプリ）。

ねられた側は、思いのまま空想を繰り広げ、稀に驚くほど斬新な解釈を生み出し共有することができる。そのための時間と手段は十分にある。まさに『鬼滅』は令和的であり、ウィズコロナ的な現象といえるだろう⁹。

研究者のまなざし

『鬼滅夜話』が数多い解説本に比して顕著なのは、“研究者による研究書である”点に尽きる。評者は『鬼滅の刃』を、“種々のバイアスを超える作品”であると位置づけている。類型的なキャラクターがほとんど登場せず（登場人物の大半に、外見から受ける第一印象と内面との間に大きなギャップがある）、その意外性が斬新な持ち味となっているためだ。主人公の竈門炭治郎の原動力は願いと怒り（恨み、憎しみとは似て異なる）であり、従来の少年漫画の主人公のような欲求や大志あるいは復讐心といったものは希薄、たくましく頼りがいのある男子である一方で心やさしくデリカシーがあり、男女問わず慕われる、安心感のある人物造形がなされている、といった具合に。ステレオタイプ、先入観、既成概念、思い込みといったものを、銜わず気負わず淡々と飛び越える、それが『鬼滅』の他に類を見ない魅力なのである。そこには、頭を掠めたことが疑問の形をなす前に受容してしまうだけの説得力があり、熱烈なファンであるほどその作風に馴染み、ときには原作者の思考さえトレースできるほど親和することであろう。

ただ、あるがままに受け入れる素直さの裏側には、批判する目を持たないことの愚かさ、恐ろしさが潜む。そこに、新たな角度から光を当てるのが本書である。著者である植氏は、『鬼滅』にまつわる多くの解説・解釈に目を通したうえで、「この作品が、「この作品のまま」に読まれるように、もう一度「原作に立ち戻って楽しむ」ことを意図して、解釈記事を書き始めた」という¹⁰。本書は個々のキャラクターを主軸として展開するのであるが、まずは“典型的な少年漫画のヒーローではない炭治郎を主人公にした必然性とは？”という、いわば作品の根源に関わるあまりにも直観的な問いの立て方に、評者は少なからぬ衝撃を受けた。そこにあるのは現然たる研究者としての目線であり、評者を打ちのめしたのは“定説”を漫然と“定説”として受け取っていた己の怠慢や鈍さに対する気まずさそのものであった。

9 「世代を超えて、こんなにも多くの人が内容を「共有できる物語」は非常に珍しいと思います。

『鬼滅の刃』はもはや文化事象のひとつと言えるでしょう」本書、5頁。

10 本書、4頁。

“問いかけ”の愉しみ——現代の対比列伝

本書は大きく四部に分けて構成され、第一部は主人公と彼の身近な仲間たち、第二部は主人公を支える「柱」の面々、第三部は主要な鬼たち、第四部ではその他の主な登場人物を取り扱う¹¹。

『鬼滅の刃』は、バイアスを超える作品であると同時に、さまざまな対比——人と鬼、昼と夜、兄／姉と弟／妹、祖先と子孫、成熟と未熟、新と旧、明と暗、そして生と死——の物語でもある。本書は、その対比をよりくっきりと浮かび上がらせ、原作中で語られる数々の言葉をより豊かな言語に移しかえる。驚嘆すべきは、著者の読み込みの深さと、首尾一貫したニュートラルな視点である。鶺鴒の目鷹の目で原作のひとコマひとコマの隅々までも決して見落とさない姿勢は、重箱の隅をつついたり定説を強いて覆そうとするような卑小さとは一線を画す。本書の主旨は、原作のユニークなオリジナリティが常態化したところに、あえて問いを投げかけることで、そのオリジナリティを再確認させ、新たな魅力に気づかせることであるが、その一方で、研究者にとって欠くべからざる“客観的な”“問いかけ”の眼差しを呼び覚ましもするのである。主人公側の人物に関しても、敵対する存在である鬼に関しても、主観が差し挟まれることはない。たとえば、第一部の不死川玄弥の章の最後に「何もうつさなくなった玄弥の目には、再び兄の笑顔が見えていたのか」というくだりがあるが¹²、ここを「見えていたことだろう」「見えていたはずだ」とはしない、これこそが研究者の目なのである。本書は、原作にはないものを読み取るものでは決してなく、根拠のない空想や願望を語らない。『鬼滅夜話』は単なる（往々にして恣意的な、希望的観測にも転じる）解釈にとどまらない現然たる資料の読解であり、それが“研究者による研究書”と評する所以である。

バイアスを超えていく時代——“研究”の真の意義とは

本書が刊行されて以降、著者の Twitter アカウントや Yahoo! のコメント欄¹³に、否

11 各部のあとにコラムがひとつずつ挿入されており（I『鬼滅の刃』の魅力的な女性キャラクターたち」、II「煉獄さんの“眉毛”」、III「猗窩座と狛治」、IV「最強の脇役「村田さん」のココがすごい！」）、絶妙の箸休めとなっている。

12 本書、83頁。

13 AERA dot. は Yahoo! へのニュース提供社であるため (<https://news.yahoo.co.jp/media>)、更新された記事は同時刻に Yahoo! でも掲載され、Yahoo! の ID を有していれば誰でもコ

定的な意見が寄せられることもあったようである。陰影に富む著者の見解に、「言われなくても自分だってそのくらいわかっていた」と主張したい読者もいることだろう。評者としては、「言われなければ気づかなかったことが多かった」というのが正直なところである。ゆえに、アンチコメントは、『鬼滅』に対する強い愛着と、愉しみの領域に“研究者”というある意味漠然とした、意識の高そうな存在が参入することに対する不安が底流するがゆえであろうと推測する。著者の専門分野がドイツ語圏の神話学や伝承文学という、一見したところ日本の鬼退治物語ないしは漫画・アニメとは何の関わりもなさそうなこともまた、条件反射的な抵抗感の一因かもしれない。その実、そうした不安や反感も単なるバイアスに過ぎないのであるが。

評者と植 朗子氏が“出会った”のは、本書が発売される直前の2021年11月、Twitter上でのことであった。これがまた実に令和的でありウィズコロナ的な出会い方であったといえる。ちょうどその頃、評者は自らの根幹をなすはずの研究に対する情熱を見失い、奇しくも植氏が本書の「はじめに」で述べているのと同様、読むことも書くこともできないという、致命的な状態に陥っていた。ついでにといつてはなんだが恥を忍んで告白すると、評者は連載開始時から氏のコラムを愛読していたのであるが、そのライターが誰であるのかには1年近くもの間、気がつかない（注意を払わない）ままであった。かねてより氏の著作¹⁴を読んでいたにもかかわらず、である。すなわち評者の心理にもまた、ある種のバイアスがかかっていたわけであり、研究者のはしくれとして不甲斐なし、というほかはない。しかしこの邂逅が、馴化からの覚醒を促す本書の直向きな語り口が、評者を深刻なスランプから救うことになったことはいうまでもない。どんなに好きなことであっても、自らの本分に対するモチベーションを持続させることは容易ではない。停滞した研究に活力を与える、それこそが研究の真価といえるだろう。

ところで、ここ数年の間に（評者の実感としては年号が変わると同時期に）、研究のあり方も多様化した、あるいは研究という概念そのものに柔軟さが加わったものだと感じている。評者の専門分野である歴史学（西洋史）の研究界において、かつては「王道以外は邪道」といった不文律があったように思う。美術史や考古学などの近接諸科学の研究成果を引用することすら、眉を顰められかねないことであった。小説や漫画は一段レベルの低いものとみなされ、場合によっては蛇蝎のごとく忌み嫌われた。研究とは高潔で混じり気のない形式ばったものであるべき、ひと昔前は確かに、

メントを書きこむことが可能である。

14 植 朗子 編著『はじまりが見える世界の神話』、創元社、2018年；植 朗子・南郷 晃子・清川 祥恵 編『「神話」を近現代に問う』勉誠出版、2018年。

そんな偏狭な風潮がまかり通っていたものである。それがこの3～4年の間に、少しずつではあるが、専門外の分野やメディアの価値に一定の重きを置く動きがみられ、漫画の設定に関する至極まじめな考察¹⁵や研究者自身の手になる漫画作品¹⁶さえ、市民権を得つつあるのである。

現在、学術情報データベース CiNii にて“鬼滅”で検索をかけると78件、“鬼滅の刃”では67件がヒットする¹⁷。対象分野は文学、文化人類学、教育、社会学、心理学、経済、金融、軍事、出版、図書館学、ほか多岐にわたり、明確にカテゴライズできない、言い換えれば分野横断的な考察も多くみられた。CiNiiには単著の情報は掲載されないため、それらも含めればかなりの数にのぼることだろう。もはや『鬼滅』はエンターテインメントの枠組みを越えた一大ジャンル、研究分野といえるのかもしれない。そもそも研究とは、各分野がそれぞれ孤島のように、他者と交わることなしに成立するものではなく、廻り、交錯し、磨かれ、昇華されていくべきものだ。

上述のアンチコメントに関しても、著者は無視することも否定することもなく、真摯に対応している模様である。どのように処理するかはともかくとして、反対意見にも耳を傾けることもまた研究者の大切な仕事といえる。氏の『鬼滅』に関するコラムは現在も〈AERA dot.〉および〈日刊SPA!〉¹⁸にて継続中である。まだ言及されていないキャラクターもたくさんおり、原作およびアニメの人気も当分衰えることはないだろう。本書はあるいは、原作を知らない人たちにとっても有用な入門書となるだろう。予備知識を得た上で原作を読むこともまた一興であろう。また、本書に異論反論がある場合には、ぜひともその意見をまとめて発表することをおすすめする。今はかつてないほど、個人が意見を発信する場は広がっている¹⁹。多くの論、意見が競い合っこそ研究は発展する。植氏が『鬼滅』のコラムを担当するに至った経緯²⁰を知

15 新保良明『『テルマエ・ロマエ』の主人公が現代日本にタイムスリップするのはなぜか』『第一学習社・地歴最新資料』23、2019年 (<http://www.daiichi-g.co.jp/chireki/info/siryo/23/tuipdf23.html>)。

16 佐藤二葉『うたえ！エーリンナ』星海社、2018年 (<https://sai-zen-sen.jp/comics/twi4/erinna/>)；同『アンナ・コムネナ』1、星海社、2021年 (<https://sai-zen-sen.jp/comics/twi4/annakomnene/>)。

17 最終閲覧日2022年2月28日。

18 日刊SPA! (https://nikkan-spa.jp/spa_comment_people/%e6%a4%8d-%e6%9c%97%e5%ad%90?cx_clicks_art_md1=4_author)。

19 YouTubeやTikTokといった動画共有プラットフォーム、音声配信アプリstand.fmなど、どんな形でもよいだろう。マルチでシンプルな配信サイトであるnoteは、研究者の利用も多い。

20 『『鬼滅の刃』人気コラム著者 植朗子さんは伝承文学の研究員【前編】』(〈神戸大学ニュー

れば、一步を踏み出す勇気が湧いてくることだろう。

スネット／メディア研 ウェブログ〉／2022年1月25日／https://blog.goo.ne.jp/kobe_u_media/e/ffe49048ad1665add4eb0e8bbebe8bd5)：『『鬼滅の刃』人気コラム著者 植朗子さんは伝承文学の研究者【後編】』（〈神戸大学ニュースネット／メディア研 ウェブログ〉／2022年1月26日／https://blog.goo.ne.jp/kobe_u_media/e/ecc6c2fe7921b1f27b16df943d11aaa5)。